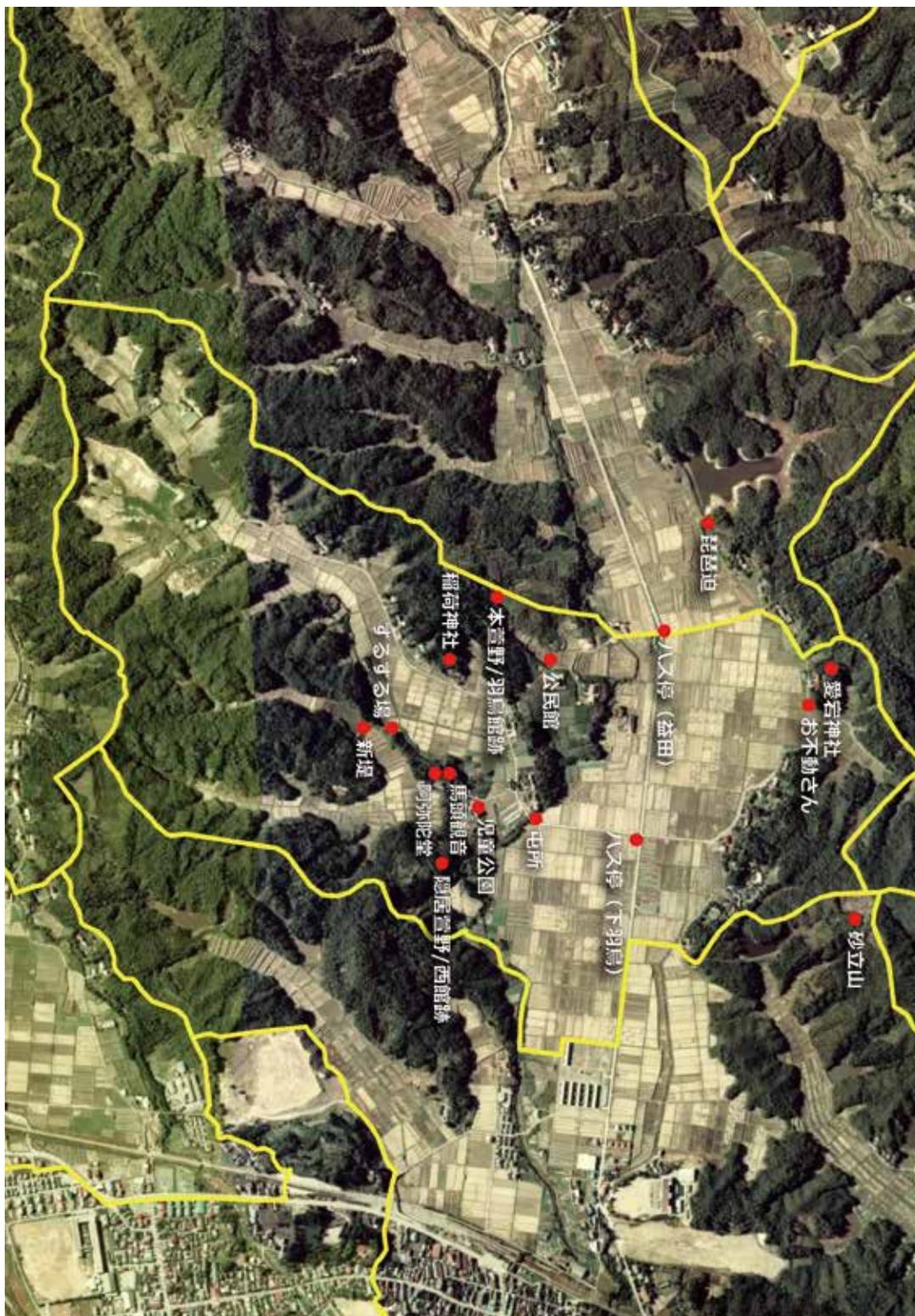




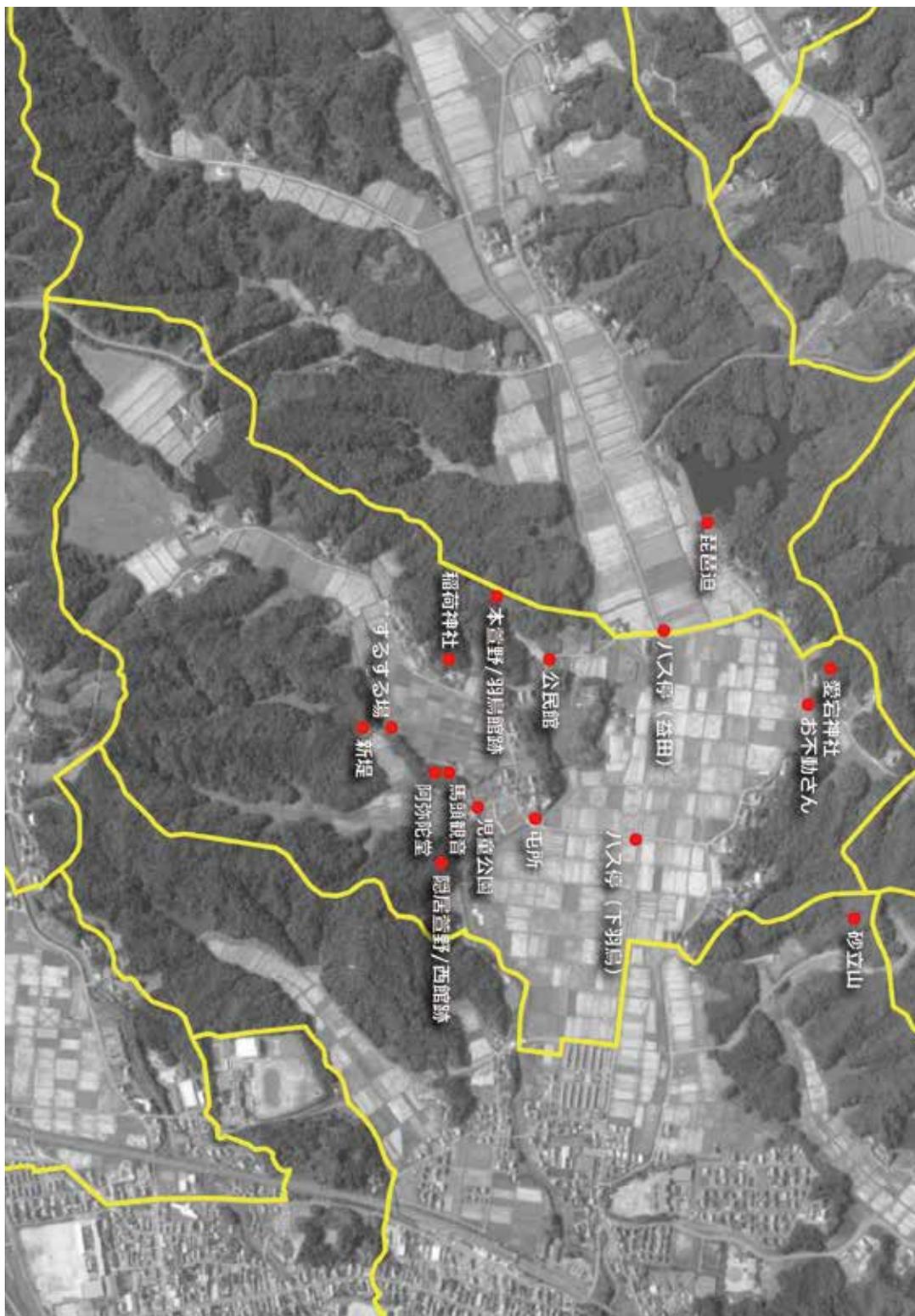
大字誌
下羽鳥の記憶

記憶地図：思い出の場所（昭和）



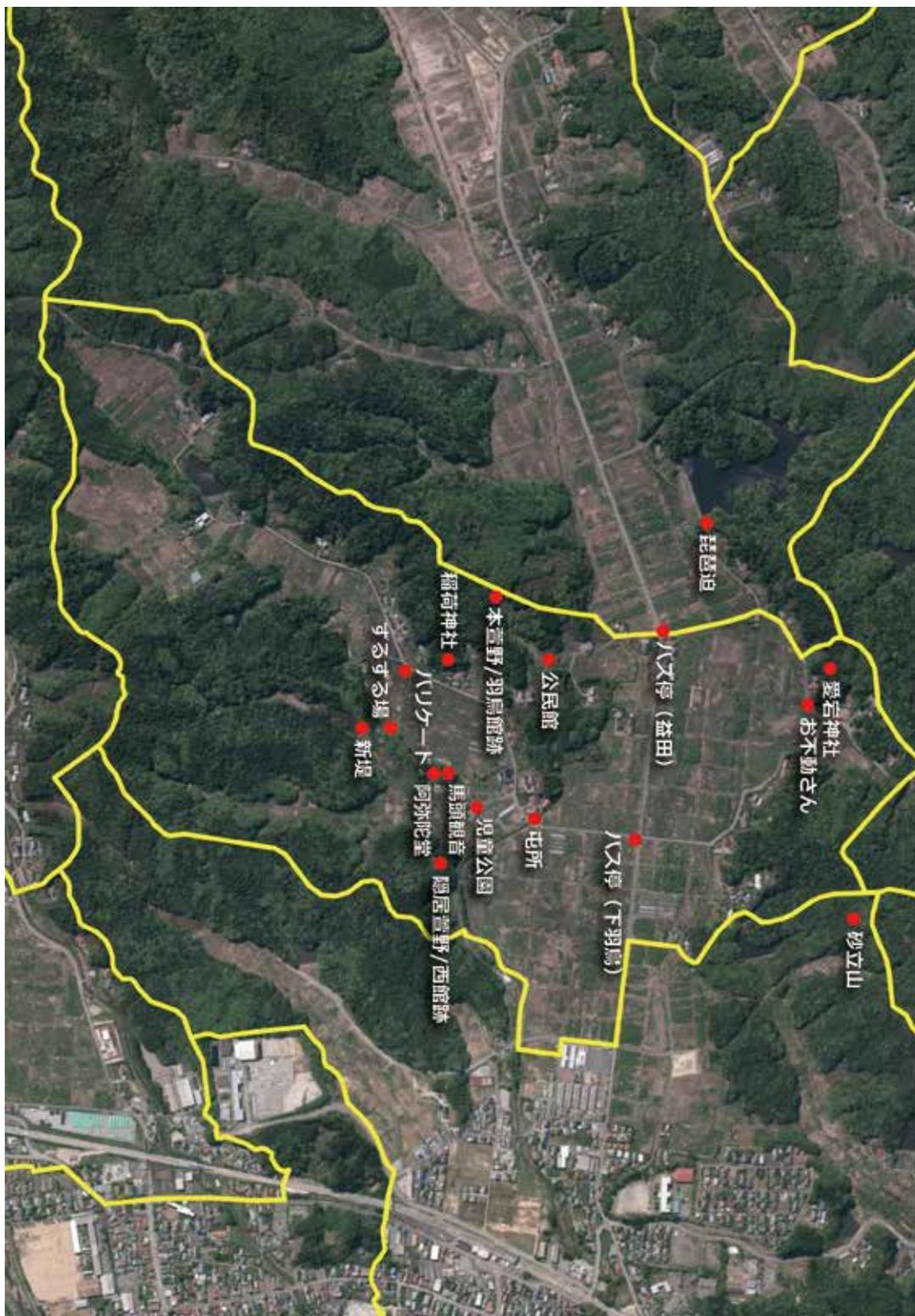
出典：国土地理院の航空写真（1978年撮影）を加工して作成

記憶地図：思い出の場所（平成・東日本大震災以前）



出典：国土地理院の航空写真（2000年撮影）を加工して作成

記憶地図：思い出の場所（令和・東日本大震災以後）



出典：国土地理院の航空写真（2022年撮影）を加工して作成

下羽鳥住宅地図(二〇一一年東日本大震災当時の状況)



① 澤上 榮	山田迫	⑪ 稲本清孝	南迫	⑲ 木幡フミイ	川原迫	⑳ 本林昭一	北冲	㉑ 渡部克己	豊田
② 阿部利一	南迫	⑫ 新家啓次	台	㉒ 前田洋海	南迫	㉓ 榎内 宏	北冲	㉔ 武田讓二	豊田
③ 栗田 要	南迫	⑬ 船山 修	台	㉕ 大谷英明	南管町	㉖ 榎内藤吉	北冲	㉗ 今村 創	南札立場
④ 里見善光	南迫	⑭ 官林 博	南迫	㉘ 榊原久子	豊田	㉙ 北崎 勇	北冲	㉚ 新妻敏子	南札立場
⑤ 升田邦弘	南迫	⑮ 横山 実	南迫	㉛ 本林雅清	北冲	㉜ 西牧宏幸	北冲	㉝ 西内由美子	台
⑥ 愛澤 万	南迫	⑯ 木幡 治	南迫	㉞ 榊原比呂志	豊田	㉟ 根本仲子	北冲	㊱ 大西敏彦	南札立場
⑦ 石田勝弘	南迫	⑰ 木幡敏郎	南迫	㊲ 本林孝雄	北冲	㊳ 村井松男	北冲	㊴ 飯塚英人	台
⑧ 長谷川清一	南迫	⑱ 木幡英征	南迫	㊵ 渡部明雄	北冲	㊶ 山口幸子	大道		
⑨ 堀川光男	南迫	㉑ 島田英男	南迫	㊷ 渡部忠吉	北冲	㊸ 渡部 明	豊田		
⑩ 大谷清英	南迫	㉒ 白川 仁	南迫	㊹ 村井佳人	北冲	㊺ 荒木雅美	豊田		



大字の親睦・研修旅行



大字の親睦・研修旅行（昭和40年ころ、山形立石寺（山寺）訪問）



琵琶迫：p.26 水利、p.34 【ため池と土の水路】



戎川：p.26 戎（えびす）川と谷底平野、
p.32 【川】



羽鳥館跡 / 本萱野（左 1978 年、右 2022 年）：p.27 中世の地頭（じとう）館跡、
p.37 萱葺（かやぶ）き屋根と萱野（出典：国土地理院航空写真を加工）



不動堂：p.28 不動（ふどう）堂、
p.45 お不動さんへのお参り



稲荷神社：p.28 稲荷（いなり）神社、
p.45 稲荷神社の祭りと改築



南迫の児童公園（2024年11月）：
p.34 中組の児童公園、p.43 盆踊り



洞穴：p.34 洞穴の貯蔵庫



新堤（2024年11月）：
p.34 【ため池と土の水路】



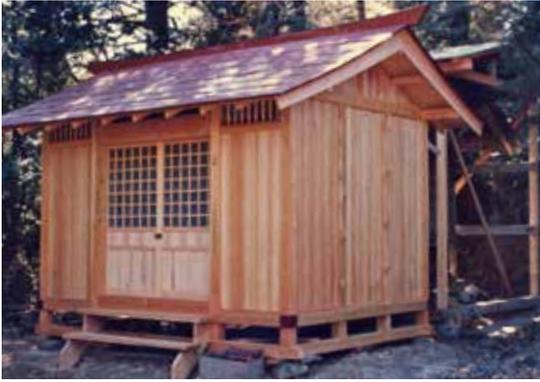
稲架（はせ）掛け（農業体験）：
p.46 コラム④下羽鳥の農業



ほ場から山地を望む：
p.26 位置、p.46 コラム④下羽鳥の農業



ほ場の側溝（2024年11月）：
p.35 土側溝、p.46 コラム④下羽鳥の農業



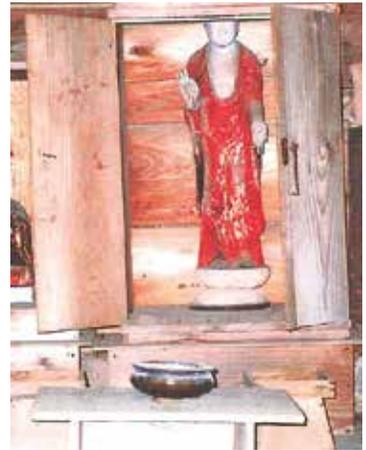
建築中の稲荷神社：p.28 稲荷（いなり）神社、
p.45 稲荷神社の祭りと改築



稲荷神社遷宮祭（1999年6月6日）：
p.28 稲荷（いなり）神社、p.45 稲荷神社の祭りと改築



稲荷神社鳥居改築記念写真（平成23年2月）：
p.28 稲荷（いなり）神社、p.45 稲荷神社の祭りと改築



旧阿弥陀堂（左）と旧阿弥陀如来像（右）：
p.28 阿弥陀（あみだ）堂、p.45 阿弥陀堂の改築と仏像の新調



新阿弥陀堂（左）と新阿弥陀如来像（右）：
p.28 阿弥陀（あみだ）堂、p.45 阿弥陀堂の改築と仏像の新調



阿弥陀堂落慶法要集合写真：p.28 阿弥陀（あみだ）堂、
p.45 阿弥陀堂の改築と仏像の新調



屯所竣工記念写真（1975年4月）：p.33 屯所



公民館での懇親会：p.33 羽鳥公民館



羽鳥公民館（2024年11月）：p.33 羽鳥公民館



婦人会による踊り（上段）、
集合写真（下段）：p.42 婦人会の踊り



老人クラブの奉仕活動：p.42 老人会（老人クラブ）



神楽奉納集合写真：p.43 神楽の保存



初發神社での奉納：p.43 神楽の保存



下羽鳥地区盆踊り（練習風景）：p.43 盆踊り



盆踊りの演奏（平成 19 年）：p.43 盆踊り



盆踊り（平成 19 年）：p.43 盆踊り



盆踊りの出店（平成 19 年）： p.43 盆踊り



盆踊りの演奏（平成 19 年、中段）
子どもたちの踊り（平成 19 年、下段）： p.43 盆踊り



通学風景：p.43 通学



町民運動会：
p.44 町民運動会



双葉町の盆踊り：
p.44 双葉町の盆踊り



下羽鳥地区交流会 2012年避難後初めての交流会（上段）、
同 2017年（下段）：p.47 大字交流会



下羽鳥地区交流会 2019 年（上段）、同 2022 年（中段）
同 2024 年（下段）：p.47 大字交流会



ブロッコリーの管理栽培（上段,2024年11月）、特定復興再生拠点区域と帰還困難区域の境界（下段,2024年11月）：p.47【東日本大震災の影響】

故郷への希望を託して

震災後、故郷へと帰る度が変わっていく様子を目の当たりにしてきました。二〇一一年三月一日発生の東日本大震災と原発事故により避難指示が発令され、一時は人の姿も消え雑草が生い茂り荒れ果てた故郷となりました。遠くに阿武隈の山々を望み、四季折々に変化する田園風景、盆踊りや祭に人々が集う広場や神社、穏やかな空気が漂い、住み良かった私どもの故郷、下羽鳥。

二〇二二年頃からだんだんに除染や家の解体などが進み、有志による農地の保全管理作業もされて地域の再生が図られていることは何よりも嬉しいことです。しかし反面、姿を変えていく故郷に戸惑いや淋しさも感じます。今まで当たり前のように思っていた故郷の姿、地域住民の家々、子供のころから遊んだ思い出の場所なども分からなくなってきました。これまで、ここに人が住んでいたことの証、先祖代々から、そして先輩方が今日までつないでくれた伝統や文化といったものを、何事もなければ子や孫に伝えていけたものも伝えることが難しい状況に直面して、何とかならないものか、後世に伝えることが必要なのではないか等と考えていました。

そのような中で、故郷の姿を文字化して残す大字誌の取り組みを知りました。地域のこれまでを知っている今生きている人たちが協力できる間に、何とかして故郷の姿を残すことが出来れば等と模索しながら、解体が進み持ち出しが出来なかったことや年月

を経て廃屋となった中での散逸した貴重な資料を探すことは困難の連続でしたが、限られた時間と機会の中でそれぞれの記憶を語り合い、ご協力いただいたて、不十分ではありますがここに一つの冊子にまとめることが出来ました。

避難生活で多くのものを失い、互いに会うのも困難な中で写真やお話を提供してくださった皆様方に感謝申し上げます。何ぶんにも時間や離れ離れになっている関係もありお話はほんの一部の方にしか伺えませんでした、ここに書かれてある故郷の様子を時に懐かしみ、そして話題にして頂き、下羽鳥の過去と未来をつなぎ今後の発展に少しでも役立てば何よりの幸せです。

現在多くの住民の方々がやむを得ず故郷を離れ、新天地において前を向いて頑張っておられますが、いつの日にかこの下羽鳥の地に多くの人や子孫たちが相集い、楽しく暮らせるような、キラリと輝くような故郷双葉町下羽鳥となってくれることを、只々、心から願う所です。最後になりましたが、本誌作成に当たり、資料を探して頂いた町役場、住民の皆様、ご助言頂いた専門家の皆様、編集委員の皆様、そして多大なるご協力を頂いた産業技術総合研究所の皆様には感謝申し上げます。

双葉町羽鳥行政区 前区長 木幡敏郎

下羽鳥誌発刊に寄せて

二〇一一年の地震・原発事故による避難生活が始まってから十四年目に入ろうとしています。一時帰宅で何度か自宅に帰ると、徐々に家の中や外観が朽ちていくことに、何とも言えない気持ちに駆られました。周りの田畑が、柳が育ち、草で覆われ荒れていく様に、悲しくもあり悔しくもあり、複雑な思いを抱いたものです。

そんな中、下羽鳥地区の避難指示が解除されることになり、農地の保全活動が始まりました。保全活動に当初は埼玉から参加していました。南相馬市に引越してきました。今地区では、営農も再開していますが、未だ自分の所から西側は帰還困難区域のまま、許可を取って自宅に入るとい状況です。

この度は、木幡敏郎さんを発起人として大字誌を作ることが二〇二四年三月の大字会で承認されました。木幡さんの強い思いがなかったら出来上がらなかつただろうと感謝しています。

この冊子を作ることで、記憶を大切にしてもらったという思いがあります。長い年月の間に、だんだんに形が変わり、住居がなくなり、手つかずの土地が荒れていくと、次の世代、更に下の世代がこの下羽鳥という地域を見た時、本当に人が住んでいたのかと思ってしまうのではないのでしょうか。今回、下羽鳥誌で記録に残せることは大変うれしく思います。

実際、私も記録を集めるために下羽鳥を歩きましたが、あそこに愛宕神社があったとか、お地藏さんがあったとか、住んでいる

ときには気づかないでいた自分の再発見がありました。この冊子を手にとってくださる方にも、下羽鳥の案内役になることを念じています。また、いつか子どもや孫、次の世代が、おじいちゃんおばあちゃんが住んでいたところに興味を持ったときに、地域を訪れるきっかけになるかもしれないと期待しています。

双葉町下羽鳥地区 地区長 堀川光男

編集にあたって

産業技術総合研究所地圏資源環境研究部門では、東日本大震災による東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴い、帰還困難区域が存在する双葉町における震災前の営みを文字と地理的な位置の情報として記録しています。その一環として、本誌の作成に関わらせて頂きました。

本誌は「第一部基本情報」と「第二部下羽鳥の記憶」で構成されています。第一部は、下羽鳥に関して町史や町役場が保有されていた資料に掲載されていた情報を収集し整理しました。第二部では、限られた範囲ではありますが、住民の皆様から伺ったお話を整理しました。記憶は主観的なものですが、客観的な事実よりも、実感のこもったお話に登場する下羽鳥の営みを伝えることを主眼としたものです。第二部の最後に設けた「東日本大震災の影響」については、これまで様々な思いが交錯してきた中で、伺える範囲のお話を整理していいものか、編集委員の皆様と迷ったところでした。可能な限り広い視野で言葉をつぎ足しながら掲載することになりましたが、十分でないかもしれません。一方で、この章は、今このときに完結するものではなくて、よりよい下羽鳥の物語を共に模索することへの序章ではないかと考えました。

取材のために下羽鳥を訪問した日、お天気にも恵まれて、地域で大切に守られてきた神社やお堂、ため池、農地に青々と育つ野菜など美しい風景に出会いました。また、木幡さんをはじめ皆様

から、資料や写真をお預かりし、お話を伺う機会を得て、地域の生き生きとした姿を思い浮かべることが出来ました。そのような地域の魅力が、今後の地域再生の基盤となるように、ここから続く未来が、明るく豊かであるように祈念いたします。

本誌に関連するインタビューの一部は、環境省・(独)環境再生保全機構の環境研究総合推進費(JPMERRF222S20906)により実施しました。また、資料収集において、双葉町役場にご協力いただきました。ここに記して感謝申し上げます。

産業技術総合研究所地圏資源環境研究部門地圏環境評価研究グループ

保高徹生

目次

記憶地図…思い出の場所……………	1
下羽鳥住宅地図(二〇一一年東日本大震災当時の状況)…	4
写真……………	1
故郷への希望を託して……………	19
下羽鳥誌発刊に寄せて……………	20
編集にあたって……………	21
第一部 基本情報……………	26
位置……………	26
戎(えびす)川と谷底平野……………	26
水利……………	26
人口……………	26
大字の沿革……………	27
二宮仕法(にのみやしほう)による開墾……………	27
中世の地頭(じとう)館跡……………	27
羽鳥館(はとりだて)……………	27
西館(にしだて)……………	27
寺社……………	28
愛宕(あたご)神社……………	28
不動(ふどう)堂……………	28
稻荷(いなり)神社……………	28
阿弥陀(あみだ)堂……………	28
地域開発……………	28
林道……………	28
請戸(うけど)川土地改良区……………	28
耕地整理事業……………	29
農業協同組合……………	29
自治組織……………	29
地域の功労者……………	29
第二部 下羽鳥の記憶……………	32
【山】……………	32
砂立(すなたて)山の松茸……………	32
【川】……………	32
川で馬を洗った……………	32
川で泳いだ……………	32
川で魚を釣った……………	32
浸(ひた)し針を仕掛けた……………	32

氷の上を歩いた	33
魚がいなくなつた	33
魚が戻つてきた	33
【地域の施設】	33
羽鳥公民館	33
旧下羽鳥集会所	33
屯所（とんしょ）	33
バス停	34
中組の児童公園	34
洞穴の貯蔵庫	34
【ため池と土の水路】	34
ため池で遊んだ	34
ため池で馬を洗つた	34
ため池の競り	34
ため池の水抜き	34
土側溝	35
蛭がいた	35
コラム①…子どもの遊び	36
手作りのスキー	36
子どもから子どもに	36
おもちゃは自分たちで	36

「ごんぼじ」で鳥を捕つた	36
ずるずる場	36
【第二次世界大戦後〜昭和四十年代の暮らし】	37
疎開者の受け入れ	37
萱葺（かやぶ）き屋根と萱野	37
本萱野（ほんかやの）	37
隠居萱野（いんきよかやの）	37
野焼き	37
兼業の仕事	38
五十（ゴトウ）の休み	38
娯楽	38
コラム②…小正月の風習	39
だるま市	39
しみ餅作り	39
いなほ付け	39
柿のまじない	39
【東日本大震災前の暮らし】	40
兼業農家	40
原発が出来てからの兼業	40
自前の木材で建てた家	40
多世代同居	40

移動販売	40
コラム③…冠婚葬祭	41
花嫁は徒歩で	41
嫁入り行列の「かご馬」	41
自宅でのお葬式	41
土葬だった	41
葬式での役割	41
葬式のうどん	41
ツナのとち和え	41
【自治組織・行事】	42
組割り	42
掲示板	42
人足の仕事	42
消防団の活動	42
青年会（えびす会）	42
老人会（老人クラブ）	42
婦人会の踊り	42
農家の集会	42
女性の玉子酒	42
神楽の保存	43
盆踊り	43

【周辺地域とのつながり】	43
「夢工房」と「よってみっせ」	43
通学	43
郡山海岸	43
脱線転覆事故	44
町民運動会	44
双葉町の盆踊り	44
町とつながる	44
貯金	44
【信仰】	45
稻荷神社の祭りと改築	45
阿弥陀堂の改築と仏像の新調	45
お不動さんへのお参り	45
愛宕神社の氏子親睦会	45
馬頭尊の石刻	45
お地藏様	45
コラム④…下羽鳥の農業	46
一反区	46
土側溝の掘り上げ	46
迫（さく…小さな谷）の作業	46
田植え	46

こじはん・一服	46
田んぼは大人の仕事	46
野菜の苗作り	46
大豆栽培	46
【東日本大震災の影響】	47
地震の様子	47
原発周辺からの公民館への避難	47
避難と一時立入	47
大字交流会	47
一部を残しての避難指示解除	47
特定復興再生拠点区域の現状	47
営農再開	47
帰還の希望と難しさ	48
自宅への複雑な思い	48
帰還困難区域の現状	48
コラム⑤…おらほの方言	49

第一部 基本情報

第一部の基本情報は、町史などの資料に基づき情報であり、「第二部 下羽鳥の記憶」の背景です。

位置

下羽鳥は双葉駅の西側に位置し、県道二五六号（井出長塚線）が東西に走り、東を長塚、北を渋川、西を上羽鳥、南を目迫（めさく）の各大字に接する。

戎（えびす）川と谷底平野

阿武隈高原の東端を水源とする二級河川戎川の流れは、上羽鳥から下羽鳥を流れて、長塚を経て前田川に合流し太平洋へと注ぐ。戎川に沿った谷底平野は氷河期後の海面上昇により入り江であったころの堆積物などで形成され、標高六十〜十五mの下羽鳥では、川の両岸に平坦な土地が広がっている。

水利

古くから稲作が盛んに行われた下羽鳥では、ため池により農業用水が共有されていた。福島県が公表している「ため池デー

データベース」には、二〇二四年現在の情報として、川原迫第2、清水迫、川原迫第1、山田迫、北沖、朴迫ため池が記載されている¹。また、東日本大震災以前は、大柿ダムから農業用水が羽鳥用水路、上羽鳥に位置する琵琶迫を経て、下羽鳥に共有されていた。二〇一一年の原子力発電所事故により居住が制限され灌漑用水路の維持が停止してから二〇二四年一二月現在、未だ灌漑は復旧していない。二〇二一年に行われた水稻の試験栽培の用水は戎川からのくみ上げによって賄われた²。

人口

近年の人口世帯数は、表一の通り。

表一 下羽鳥人口および世帯数³

調査年	総数	男	女	世帯数
平成七（一九九五）年	一八三	八一	一〇二	四五
平成十二（二〇〇〇）年	一八五	八七	九八	五二
平成十七（二〇〇五）年	一九四	九六	九八	四七
平成二十二（二〇一〇）年	一七〇	八二	八八	四五

大字の沿革

下羽鳥は、相馬藩標葉（しねは）郷に属した村の名として町史に出現し、寛永検地（一六三〇年）により定められた村高、村位の一覧に記載されている⁴。元禄一〇年（一六九七）に、標葉郷が南北に分かれてからは、南標葉郷の二九ヶ村の一つとなり寛政七年（一七九五）には、上羽鳥と同じ肝煎の管区だったことが記されている⁵。同じく町史に、下羽鳥村の戸数が、天明三年（一七八三）に二八、嘉永元年（一八四八）に二四だったという記述がある⁶。下羽鳥は、明治二十一（一八八八）年に公布された市制町村制に基づく町村合併によって、長塚村に編入され、大字となった。

二宮仕法（にのみやしほう）による開墾

天明三年（一七八三）から六年（一七八六）頃の飢饉の後、相馬藩内では、二宮尊徳の教えに沿って村を立て直す二宮仕法が、二二七村のうち一〇一村に導入された。開墾を中心とした事業の一環として多くのため池が作られたという。弘化二年（一八四五）から明治四年（一八七二）の間に、下羽鳥村を含む五十五村が二宮任法による事業を完了した⁷。

中世の地頭（じとう）館跡

現在の下羽鳥地域には、中世に地頭館があった⁸。

羽鳥館（はとりだて）

町史によれば、羽鳥太郎の館である羽鳥館が、現在の小字台に位置し、建武四（一三三七）年の歴史的記述に登場する。「館の前を戎川が流れ、豊田・益田・原田など田のつく地名が並んでいる。双葉町の数多い畑の中でも、広い方に属する。羽鳥太郎は湿田ながらも比較的広い水田地と在家農民を支配する村度地頭であった」⁹。

西館（にしだて）

永禄（一五五八〜一五七〇）のころには、西館と呼ばれる館が小字南管町および南迫に位置した。東館と呼ばれた新山城に對する呼称であり、東館の搦（から）め手を護る配置だった。町史によると、「戎川南側の高地点を選び、四方を削りだして急斜面となし、標高四・二メートル地点を中心に平坦な曲輪（本丸的機能を持たせている）を築造している。曲輪の高さは四〜五・五メートルであり、西方・並びに北方には二の丸的機能をもつ細長い曲輪がある。」「本丸的機能をもつ曲輪の東〜南東面には高さ一〜一・五メートルの土塁が残っている。」「登り口（虎口）は北のコーナーのようである。また、東側斜面にも小径があり、

現在登り口として利用している。以前は萱山であった。」という¹⁰。

寺社¹¹

愛宕（あたご）神社

北沖に所在。「目迫には愛宕下という地名があり、下羽鳥の豊田に愛宕神社が祀られている。愛宕神社の本社も京都である。祭神は軻遇突知神（カグツチノカミ）で火を司り、火防、火伏の神であるとともに、境の神として他村から入る



愛宕神社：双葉町教育委員会
「双葉町文化財資料第二集」より転載

疫病をはばむと信じられ、また軍神として武将の守り神としてあがめられた。」という¹²。また、双葉町文化財資料第二集に、境内に古くからあった相生の松に関する絵画が上羽鳥今村氏宅に保存されていると記されている。

不動（ふどう）堂

北沖地内に所在。不動堂の開基は不明、尊師は普門院の棟札

があり、天保や文化の記があるが、詳細は不明。

稲荷（いなり）神社

南迫に所在。倉稲御魂神（ウガノミタマノカミ）を祀り、旧二月初午、旧七月九日を祭日とする。平成十九年に社殿、平成二十三年に鳥居を改築した。

阿弥陀（あみだ）堂

川原迫八十番地に所在。字川原真言宗の仏堂で嘉永五年改築の棟札が確認されている。北沖より合祀したと伝えられる千手観音および十一面観音の側仏が祀られている。境内の古井戸は、元寺跡だという。平成二十一年にお堂を改築し、令和六年に阿弥陀如来像を新調した。

地域開発

林道

林道下羽鳥線は、下羽鳥南迫から目迫愛宕下まで一キロ七二八メートルが、昭和四十七〜平成元年に敷設された¹³。

請戸（うけど）川土地改良区

請戸川土地改良区は、浪江町、小高町（当時）。双葉町の三町を区域とする灌漑事業で、請戸川上流に大柿ダムが昭和四十九年度に国営事業で着工、昭和六十三年度に完了した。一

方で、この事業は、費用が当初予定を大幅に上回ったことが政治問題となり、双葉町が、小高（おだか）町、浪江町と共に、受益者負担分の軽減を国や県に陳情する事態が生じた¹⁴。

耕地整理事業

町史によると、羽鳥地区は相馬藩内で屈指の米どころとして知られたが、明治三十八年に下羽鳥耕地整理事業が行われ、面積が、二四町九畝二十歩から二八町六反九畝二六歩に、拡張された¹⁵。また、明治四十二年には、第二区において、第二区七町四反六歩から九町三反三歩に拡張された。



耕地整理記念碑（北沖）

農業協同組合

農業協同組合の事業は、地域のインフラとして機能してきた。昭和二十三年に長塚農業協同組合が設立され、昭和三十三年に新山町の農協と合併して、双葉町農協となった。同農協の事業の中で、信用・共済の利益は、東京電力による土地買収が始まった昭和四十年から顕著に伸び、地域の経済状況を把握する参考になる。なお、双葉町内に店舗を構える金融機関は、昭和五十四年まで農協のみだった¹⁶。

自治組織

伝達や共同作業の単位として、下羽鳥は、従前には北、中、入（いり）の三組に分かれ、回覧板などの伝達や共同作業の単位となっていた。戸数の増加に伴い、北組を二組に分け、一組（四組の名称となった。（おそらく平成十三年）。

地域の功労者

町議会議員、農業委員、区長を務められ、地域や町の発展に寄与された方々。

表二 双葉町議会議員

氏名	任期
木幡 実	昭和 22 年 4 月 30 日～ 26 年 4 月 29 日
前田 定芳	昭和 22 年 4 月 30 日～ 30 年 4 月 29 日
木幡 正雄	昭和 30 年 4 月 30 日～ 38 年 4 月 29 日
根本 隆義	昭和 38 年 4 月 30 日～ 46 年 4 月 29 日
木幡 貴久	昭和 54 年 4 月 30 日～平成 3 年 4 月 29 日
木幡 敏郎	平成 3 年 4 月 30 日～ 23 年 11 月 19 日

表三 農業委員

氏名	任期
木幡 正雄	昭和 24 年 8 月 18 日～ 41 年 7 月 19 日
木幡 貴久	昭和 47 年 7 月 20 日～ 53 年 7 月 19 日
阿部 利雄	昭和 53 年 7 月 20 日～ 59 年 7 月 19 日
木幡 敏郎	昭和 59 年 7 月 20 日～平成 11 年 7 月 19 日、 平成 14 年 7 月 20 日～ 17 年 7 月 19 日
前田 洋海	平成 18 年 9 月 20 日～ 27 年 5 月 24 日
村井 佳人	平成 20 年 2 月 20 日～ 26 年 1 月 31 日
木幡 治	平成 26 年 2 月 1 日～現在に至る
澤上 榮	平成 27 年 7 月 8 日～現在に至る

表四 区長

氏名	任期	氏名	任期
沢上 精	昭和 22、23 年	北崎 一雄	昭和 41、42 年
大谷 守親	昭和 24 年	里見 一雄	昭和 43～45 年
榎内喜一郎	昭和 25、26 年	前田 府	昭和 51、52 年
村井 盛	昭和 27 年	阿部 利雄	昭和 55～56 年
木幡 実	昭和 28 年	横山 敏	平成 10、11 年
村井 正	昭和 29～33 年	前田 洋海	平成 14～21 年
島田清次郎	昭和 34～36 年	阿部 利一	平成 28、29 年
北崎 一雄	昭和 37、38 年	木幡 敏郎	平成 30～令和 5 年
島田清次郎	昭和 39、40 年	堀川 光男	令和 6 年～

注：下羽鳥は、昭和 52 年に上羽鳥と合併して羽鳥行政区となり、以降は、一方の地区住民が区長をもう一方が副区長を勤めていた。

- 1 福島県「ため池データベースの公表について」 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36045d/nouchikanrikai1.html>
- 2 朝日新聞デジタル「双葉町で試験栽培の水稲を初めて収穫」 <https://www.asahi.com/articles/ASP9Q6QG-VP9QUGTB002.html>
- 3 国勢調査小地域集計
- 4 「双葉町史第一巻通史」四一九頁
- 5 同前、三九一頁
- 6 同前、六四八頁
- 7 同前、四六九頁
- 8 同前、二九八、二九九頁
- 9 「双葉町史第二巻資料編1」二六七頁
- 10 同前、二六八頁
- 11 「双葉町文化財資料」
- 12 「双葉町史第一巻通史」三五七頁
- 13 同前、一〇一三頁
- 14 同前、一〇四〇～一〇五四頁
- 15 同前、一〇二七頁
- 16 同前、九六一頁

第二部 下羽鳥の記憶

【山】

丘陵地の下羽鳥地区では、高い山はなく、森林に覆われた丘陵が山と呼ばれていた。

砂立(すなたて) 山の松茸

砂立山は、水はけの良い松山で松茸も生え、傘が開くという香りがした。他人の山でも入ってはいけないということはなかった。

【川】

下羽鳥の戎川は、小規模で水量もあまり多くないが、ため池と同じく、農薬用水だけではなく様々な用途があった。

川で馬を洗った

農作業の後、泥で汚れた馬の体を洗っていた。馬洗場は屯所(とんしょ)があった場所の側で、川に入りやすくなっていた。

川で泳いだ

昔は、プールなんか無い。浄化槽の水も流れてなくて水がき

れいだったから、戎川で泳いでいた。今の堰でなくもっと下がったところにあった堰で泳いだ。結構深くて二メートルくらいのところもあった。馬洗場は、川に入りやすくなっていて、子どもたちにも恰好の遊び場だった。

川で魚を釣った

川にはフナやナマズやゲンゴロウがいた。ナマズはいっぱいいた。堰なんかにはウナギがいた。かつほし(川干)で、流れをせき止めて魚を捕ることもあった。(昭和三十年代)

浸(ひた) し針を仕掛けた

子どもたちは、川で浸し針を仕掛けた。「夕方になったら、自分のそれぞれ川に行って二十本や二十五本ぐらい掛けてくんだけ。そうすつと、あしたの朝、三匹や四匹、ウナギ掛かってんだよ。ナマズかかったり。」「遅く行くと、餌ばかり食べられて、全然。ウナギは逃げて」「学校に行く前に釣って、バケツに何匹も入れた。毎朝、三匹くらいは釣れる」ウナギやナマズのエサは、ダイロミミズ。麦畑なんかをつくと出てくる。一メートルくらいのタコ糸に針をつけて、そこにミミズをつけて川に浸しておいた。

氷の上を歩いた

昔は、堤にも川にも氷が張った。スケートしたり、川の上を歩いて渡ったりできた。

魚がいなくなった

PCPという農薬（除草剤）が使われるようになって川から魚がいなくなった。（昭和四十年代）。その後、川自体もコンクリートで固められて様子が変わった。

魚が戻ってきた

川の水はだんだんきれいになって、震災前のある日にはカワウが来て、ウナギをくわえてんのをみた。これ、ウナギいんだな、と思って。雷雨の後、川が濁った時に、もともと堰のあった場所で釣ってみると、竿を入れた瞬間にウナギが掛かった。強い引きに大物の予感。胸が高鳴った思い出がある。

【地域の施設】

羽鳥公民館

羽鳥公民館は、上羽鳥と下羽鳥が行政区として合併したときに、共用施設として建設された。下羽鳥の大字会はここで行わ

れた。写真や町民大会で優勝したときの賞状とかが飾ってあって、コップなどもそろっていた。

以前、公民館の辺りの川のほとりは、今みたいに整備されていなくて、竹やぶだったが、今はコンクリートで護岸されている。

旧下羽鳥集会所

羽鳥公民館の建設の以前に下羽鳥にも集会所があり、合併後も下羽鳥の部落会をしていたが、台風で流されてしまった。

屯所（とんじょ）

下羽鳥の集会所の隣の建物に消防団のポンプが格納されていた。下羽鳥の集会所が流された水害後に屯所を移転新築し、「ぎゅうぎゅうに」詰め合わせて部落の集まりをしたこともあった。



標葉町消防団ポンプ披露式

バス停

県道井手長塚線（県道二五六号）を寺沢までバスが走っていて、「下羽鳥」と「益田」の二つのバス停が地区内にあった。

中組の児童公園

田んぼを埋め立てた場所が児童公園になっており、盆踊り会場にもなっていた。

洞穴の貯蔵庫

家の裏の崖に掘られた洞穴があり、震災前は、野菜の貯蔵などに使われていた。

【ため池と土の水路】

地域に点在するため池の水は、灌漑用の水路を通って田んぼで使われ、その他の用途でも利用されていた。

ため池で遊んだ

大きな堤は、一時間で一周できないくらい広がった。「昔は泳いだんだ、プールなんてなかったから。」新堤でも釣りをした。魚だけでなくザリガニも釣った。他にも、フナ、ナマズ、鯉、

エビ、ゲンゴロウなどいろいろいた。

ため池で馬を洗った

小学校五年生くらいのころ新堤で洗っていたのを覚えている。「背中はおやじが洗って、腹の辺りをこすって洗った。」コンクリートの設備があるところが浅くなっていて、馬を入れて洗うのにちょうどよかった。

ため池の競り

堤の中の魚を捕る権利、堤ののり面の草を刈る権利は、部落で集まって競売にかけて、一つ何千円で競り落としていた。草も大事な資源だった。代金は部落の収入になる。昭和が終わるまでには行われなくなっていた。

ため池の水抜き

秋、田んぼに水をかけなくてよくなった頃、ため池の水を抜いて魚を捕った。「じょうご」と呼ばれる栓を抜いて、堤の水を干し、魚を取った。売ったか無料だったかわからないが、みんなを集めて取った魚を分けた。魚は串にさして焼いた。鯉の稚魚を放して育てることもあり、鯉のアライとか甘露煮とか

が、ごちそうだった。川魚を食べたのは昭和まで。

土側溝

田んぼの周りの水路は、コンクリートで固められていない昔ながらの土側溝だった。

蛭がいた

「震災前なんかは、うちの裏の田んぼんどこで、蛭いたよ。うちの前のちっちゃな堀。そこにも蛭いたし。」県道のほうでも見た。「でも、十年以上水張ってねえからさ。」

コラム①：子ども遊び

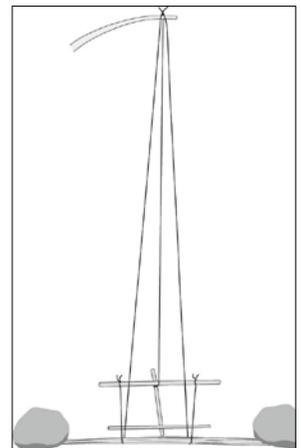
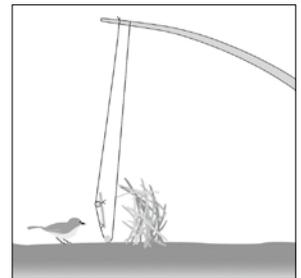
自然豊かな下羽鳥で子どもたちはのびのびと遊んでいました。第二次世界大戦後から昭和四〇年代くらいまでの記憶です。
手作りのスキー

雪が降ったら、自分たちでスキーやそりを作って坂を滑って遊んだ。竹藪から竹を切ってきて、木を燃やしてあぶって曲げて滑りよくした。小学生でも、中学生でもみんなつくってだど。雪は、三十センチくらい。膝くらいまで降ったのは何回もある。子どもから子どもに

昔はガキ大将つてのがいて、高学年が小さい子どもの面倒をみるものがあって、そり遊びだの教えた。かくれんぼだのなんだのとどまらない。

おもちゃは自分たちで

阿弥陀様の境内なんかでも遊んだ。杉鉄砲、紙鉄砲、水鉄砲、ゴム鉄砲、みんないろいろ遊ぶ道具、小刀で作ったんだわよ、みんな。パッタ（メンコ）は売ってた。ベーゴマも。シマダさんが隣のナガエさんが作ったのを預かって売っていた。パッタは缶詰の缶でわき（周り）を固めて遊んだ。



「ごんぼじ」の側面（上）
と正面（下）

「ごんぼじ」で鳥を捕った

「子どもの頃は、「ごんぼじ」つつつて、小鳥捕るわな、田ほの落ち穂を拾って、わな掛けして。ポケットさ、いつもナイフ入ってたわ」ナイフとたこ糸で罟をしかけて小鳥を捕って食べていた。十個くらい山で仕掛けて二匹、三匹ずつ毎日とってきた。

ずるずる場

南迫の道端の三〜四メートル土の傾斜「ずるずる場」に集まった。「今はほら、急になってっけども、あれ、もつとまだらかだったような気がすんだよね。」「みんなして登って。用意ドンで駆け足で山に登って、それで登らなくて、ずるずると下がってくる。」「ただそこさ行ったんではねえんだ。確か、ヤマイチゴ採ったり。」「ランドセルなんてぶん投げて。」

【第二次世界大戦後〜昭和四十年代の暮らし】

疎開者の受け入れ

小さいころ、戦争が終わったばかりで、疎開者が五世帯住んでいた。隠居屋に三世帯、母屋に二世帯。樺太から引き揚げてきた人も居た。自分が結婚する近くまで（昭和三十年代）。「だから子どもが、いっぱい、やたらにいたから、子どもが集まりやすいところで、みんな集まって、狭いところで野球やったりして遊んだ。」



第二次世界大戦中、家族を送り出し、疎開者を迎え入れた。

萱葺（かやぶ）き屋根と萱野

昔の家々は、萱の屋根だった。二十年に一度葺き替えをして、だんだん瓦屋根に代わって、最後の葺き替えは昭和四十年代だっ

た。萱を刈るところまでは、助け合いの共同作業で、その萱を使って屋根を葺く職人が羽鳥や渋川にいた。葺き替えに使う萱は、共同で管理する萱野からとった。萱野は、中世に標葉一族の武士が居を構えたところだと伝わっている。

本萱野（ほんかやの）

二十軒の家が毎年一軒ずつ屋根を葺き替えるための萱を取った。各家二十年に一度葺き替えができる。公民館のそばで、四町くらいの広さ。

隠居萱野（いんきよかやの）

前田さん宅前にあって、ちよつとした修復するための萱をとった。毎年二軒ずつで使って十年に一回屋根を直すのに使えた。

野焼き

昔の旧正月くらいだから、春三月ぐらい、萱野の野焼きから作業が始まる。「広いところ、ぐるっと回りながらわきから火つけて、中に燃えていくのはかまわねえ、こっちにさえ移んなかったら。」古い株を燃やすといい萱が育ってくる。秋には、各家一人ずつ出て、四十人ぐらいで萱刈りをしていた。二日くらいかかる。

兼業の仕事

「学校卒業してからは、土方なんかさ行つたんだわ。一日三百円ぐれえだ、日当。頼んでおいて、若者だったから「いつでもこ」と声をかけてもらった。上羽鳥のえん堤造つたりなんかした。鉄道工事は、日当が少し良くて五百円ぐらい貰えた。ラーメンが、三十〜五十円のころ。」

五十(ゴトウ)の休み

田植えが終わり、共同の作業が一段落する七月からは、五十(ゴトウ)とって、五と十のつく日に農業を休むことになっていた。若い者としては嬉しかった。地域によっては一六(イチロク)というのもあったようだ。隠れて仕事すると「門松立てられっぞ」と言っていた。

娯楽

映画が人気だった。新山に映画館があつて流行っていた。『丹下左膳』、『赤堂鈴之助』、『黄金孔雀城』なんかを観ていた。

テレビは、東京オリンピックで各家庭が買う前は、早く買った人のところに、みんな観に行っていた。「プロレスなんてやっている時は、行くと「どうぞどうぞ」と見せてくれた。あの頃はみんな

な助け合いだったから。ちよこつと観て帰る。」

「テレビでは、『快傑ハリマオ』も人気があり、『恐怖のミイラ』は見た後、おっかなくて帰れなくなった。」

「実家に遊びに行くというのがあった。」

「夏は、海水浴。郡山海岸まで三〜四キロ歩いていた。(海岸には)まだ、塩を炊く釜があった。」

コラム② 小正月の風習

旧暦の一月十五日の小正月は、「いなほ」を飾って迎える風習があり、紅白の餅とダルマ市で買った飾りをつけました。

だるま市

旧暦の一月十三日には、長塚ダルマ市が行われていた。ダルマは毎年少しずつ大きくしていくのが習わし。少しずつ良くなる様子を表しているのでは。ダルマや熊手や、鯛、宝船、恵比寿（えびす）様、大黒様、カブなどの「煎餅（せんべい）」を買って帰った。これらの煎餅は、いなほ付けのお飾りにする。ダルマ市は、新年の初市のため近隣の村や町から大勢の人が出て大変に賑わう祭りだった。

しみ餅作り

十四日には、どこの家でも朝早くから保存食用のしみ餅をついた。ヨモギを入れた草餅や、干し柿を作った柿の皮を入れた柿もちなど、四〜五回ほどついた。寒い夜を待って三本の藁（わら）の根元を縛ったもので餅を編み込み二つ合わせて縛って水につけて、屋外の竹竿に下げ凍らせて明朝に部屋で自然乾燥すれば出来上がり。



いなほ付け

稲の豊作を願ってどこの家でもいなほ付けが行われた。餅つきの際に紅白の薄く伸ばした厚さ1cmほどの餅を作り、午後には枝ぶりのいいミズノキを山から切ってきて、その木の枝に、紅白の餅を細長く紐のようにしたものを手でちぎって枝に付けていき最後に、だる



ま市で買ってきた煎餅で飾り付けて玄関を入った部屋に飾り付ける。十五日ほどで下げた後は、新聞紙を広げて枝から餅をもぎとり、缶などにいれて保存した。油で揚げて膨らんだ餅に塩をまぶして、子どもたちに食べさせた。食べ物の少ない時代、競い合って食べた。
柿のまじない

旧暦一月十四日の夕方にはいなほ付けで余った餅とナタを持って自分の家の柿の木をまわってナタで傷をつけ、大きな声で「なつか、なんねが、なりもすか、なりもさねつか、切ってしま、なりもうす、なりもうす（なるか、ならないか、ならないつもりなら切ってしまおう、なります、なりません。）」と言いながら、柿の木を回って歩く。傷をつけた所に餅をつけながらまわって歩く。柿が今年も豊作になるようにとのまじないです。

兼業農家

下羽鳥では、大半が兼業農家だった。「お金はなくても、農業して、山のもの、川のもの、資源が豊富で、楽しい人生だった」。

結婚後、下羽鳥に住んだ。夫と一緒に野菜の苗を育てて苗市に出していた。早朝から農作業をして、その後町工場に出勤、夕方帰宅してからも、草が伸びていれば刈ったりした。

原発が出来てからの兼業

原発できてからは、多くの住民は原発で働いた。「仕事探しも、みんな、今度は原発。賃金が高かった。やっぱり、原発は働く場所だったんだ。あの事故さえなければ、東京よりも賃金高いんだから。他から、出稼ぎにも来てた。「東電の中に入ってる会社で、「俺んところ、もう目いっぱいだから、もう来なくていい」って言うところねえんだ。どこでも人が欲しかったんだ。部落の半分以上は原発に関わってたな。親子三人して原発さ行ってるなんて人たちがいたんだ。金入るから、農業機械は新しくなる。だから東電のことはあまりうらむことなかった。そうやって、いい時代もあったんだから。こんな事故でもねければな。たまたまだけいい。」

自前の木材で建てた家

自分の山の木を製材し、家を建てた。思い入れがあった。

多世代同居

三世代から四世代同居の世帯もあった。「下は六歳から上は九十六歳までの同居だった。平日は、孫の迎え、炊事、洗濯、掃除を引き受けていて、忙しい日々を送った。」

移動販売

浪江の請戸から魚を、自転車やバイクで売りに来ていた。「みんな回って歩くの、一軒一軒、「今日は魚、要るか」って。」頼めばさばいてくれた。豆腐の移動販売も来ていて、都はるみの歌を流していた。

コラム③ 冠婚葬祭

昔は冠婚葬祭に使う八畳間が、二、三部屋、各家にあり、足りなければ、庭にテントを張りました。お膳も五十客くらい各家で持つていて、結婚式も葬式も自宅が式場だった頃の冠婚葬祭の記憶です。

花嫁は徒歩で

新婦は、実家から婚家に車（昔は人力車や馬車）で向かっても、途中から歩いて来た。「他の人に見せるように、わざわざ歩ったんだわ。」嫁入道具も、車や馬車に積んできた。玄関先でゴザを敷いて椅子に座り結婚の記念写真を撮った。

嫁入り行列の「かご馬」

「かご馬（かごんま）なんつうもあつたべな。」男が女ものの長じゅばんを着て、腰ひもを締めて、藁で作った馬の首に、はなどりもつけ、籠を背負って行列から見物人に酒を振るまった。暴れて歩くので、人力車を蹴って引手を折ったというのも聞いたことがある。後の結婚式場でも余興になった。



嫁入り行列を
盛り上げたかご馬

ある。後の結婚式場でも余興になった。

自宅での葬式

葬式は自宅です。墓まで銘旗を持って歩

いていた。女性は早朝四時くらいから赤い豆を入れたお蒸かしなどの料理を作った。客や家族や親せきに、味噌汁、煮しめ、お浸し、漬物、大したものでもなくても、みんな昼かけてくるから食べてもらう。最後に覚えている家での葬式は、平成十二、三年。

土葬だった

以前は、土葬だったので、穴を掘って棺桶を収めた。昔は、「火葬は熱いからダメだ、焼かないでくれ」、と言っていた。郡の火葬場が出来て、土葬はなくなった。

葬式での役割

穴を掘る「六尺」の他、葬式の役割を記録した昔からの「役割帳」を保管して、一軒二人出していた。戸数が少ない組では、他の組からも役が出ていた。北組の葬式は、お客さんよりも一軒二人の食べる分が多かった。

葬式のうどん

お代わりする美味しさ。日野食堂のたれをまねて「煮干しなんか山ほど使って、出汁とって、抜群に美味しかった。」

ツナのとも和え

アンコウならぬツナのとも和えは、「葬式にも子供が生まれた時にも作る」。切り干し大根を水でもどし、缶のツナを油をきらずにいて炒める。味は、みそでも醤油でもいい。

組割り

下羽鳥の組は三組だったが、戸数が増えて、入組十三、中組は八、北組二十二になった。国勢調査の世帯数とは異なるが、回覧板を回す家の数なので、例えば二世帯住宅などは一戸と数えている。大きな組では、回覧板が回りきらないなどの不都合があったので、北組が2つに分かれて四組になった。

掲示板

下羽鳥の停留所の傍に掲示板があつて、町のいろんな情報を掲示していた。

人足の仕事

各家から労働力を出し合うことを人足といった。萱野の刈り取りや、田の土側溝の修理なども、人足仕事だった。

消防団の活動

夏場は、朝四時五時に起きて七時くらいまで訓練をしてから、仕事に出勤することもあった。双葉の第八分団は町で一番になって郡の大会に出たこともある。他地域から転入しても、消防団に

入れば、地域の人と親しくなることが出来た。

青年会（えびす会）

地区の跡取りを中心に組織され、主な活動は、盆踊りや伝統行事の継承や、地域の子どもたちの育成のためのキャンプや親睦旅行などの中心的な役割を担っていた。

老人会（老人クラブ）

老人会に入ったら、旅行に行けた。ご褒美という感覚。奉仕活動で花を植えていた。

婦人会の踊り

婦人会では、部落ごとにそろいの浴衣を作って敬老会や盆踊りで踊った。双葉町の盆踊りにも参加していた。

農家の集会

一月のころ、当番の家に集まって鍋を囲んでいた。

女性の玉子酒

共同で飲食するとき、女性が酒を飲むことはなかったが、玉子

酒は作って飲んでいた。

神楽の保存

保存会が公民館で活動をしていた。震災後、令和三年に神楽、大太鼓、小太鼓を、初発神社に預けた。

盆踊り

櫓（やぐら）はみんなで朝から作業して一時間ぐらいで出来ていた。あとは、歌う人、太鼓をたたく人、屋台で焼き鳥を焼く人とそれぞれに役割があった。始まる前にはテープを流していた。くじ引きの景品がすごくて子どもたちが喜んでいた。

盆踊りの唄は、基本があつて、それに歌い手が工夫して歌詞を足す。カセットテープに往年の歌い手が唄が保存されていた。

ハアー ハアー ひとつあげましょか コリヤ はばかりなが
らよー コリヤ

ハアー ハアー うたいそんじはなー コリヤ ごめんなれよー

ハアー ハアー ことしやほうねんだーよ コリヤ ほにほがさ

いてよー コリヤ

ハアー ハアー みちのごくざにもー コリヤ あのさなー

こめがなるよー

（下羽鳥盆踊り唄抜粋）

【周辺地域とのつながり】

「夢工房」と「よってみっせ」

農産物の余ったものを利用しようと、双葉町の農家の女性たちが中心になって、今でいう六次化の活動をしていた。

二〇〇四年に加工場「夢工房」と直売所の「よってみっせ」を始めた。

通学

学校は北小学校、羽鳥は近かった。小学校では、集団登校。中学校は、町の中心部にあつて、北と南、二つの小学校に通っていた生徒が一緒になった。家が二キロ以上離れていないと自転車を通うことが出来ず、途中で先生が見張っていた。標葉町から双葉町に町名が変更されて小学校も中学校も標葉から双葉に名前が変わった。高台に中学校が移転した跡に図書館が建った。

郡山海岸

海水浴だけでなく、元日は、歩いて行って日の出を迎えた。「二時間以上かかったんじゃないか。元気のいい時でね。若い時。」キャンプ場で、子どもの夏休みキャンプもした。

脱線転覆事故

昭和三十二年常磐線で北上号が転覆した夜には、自宅までパーンというすごい音が聞こえた。何事かと、下羽鳥からも大勢が駆け付けた。

町民運動会

秋、九月の第一日曜日、町のグラウンドで地区対抗の町民大会があつて、震災前まで、半世紀以上続いていた。昔は、山の方の集落は、町に出る機会もあまりなかつたので、楽しみな行事だつた。

若かりし日は、綱引きに引つ張り出された。リレーと綱引きは強かつた。選手は部落の常会で集まつて決めた。体格のいいひとが綱引き、足の速い人はリレー。地域の中で大体分かつていた。あとは玉入れとか、老人と子どもは宝ゲームとか。上・下羽鳥、寺沢二二〇戸くらいが一緒に区割りだつた。打ち上げは、刺身やオードルを取つて三地区合同の反省会と交流会だつた。一堂に会する貴重な機会だつた。



公民館に並ぶ町民運動会の賞状

双葉町の盆踊り

盆踊りは、双葉町の部落ごとに櫓があつて、あちこちでやっていたが、八月十五日頃に一堂に会して、部落競演の盆踊り大会ついでのがあつた。一チームだいたい十五分ぐらい、交代でたたく。部落のたたき方とか歌う癖とかあるので、一チーム、一セットそろわないと、なかなか合わない。部落ごとに違うから、味がある。

町とつながる

「震災でもなければ、だんだんとつながつてくつかなとは思つてただけど、町にな。だけでも、すぐ近くまであれ、東電社宅だ何だつて来てたからな。」

貯金

「(農協に)定期預金を一定額積んだ人は、少しの料金でヘリコプターの遊覧飛行ができた。当時としては、大したイベントだつた」



遊覧飛行の機体に「三ツ矢航空」の社名

稲荷神社の祭りとお改築

中組・入組の氏子が中心で春と秋に大祭をしていた。最近では二月の初午祭一回で護摩を焚いて祈願していた。以前の社殿は、明治八年の建設だったというが、平成十九年一月に松の倒木で壊れたため、住民の浄財で建て直し、同年六月六日に遷宮祭を行った。

阿弥陀堂の改築と仏像の新調

共同墓地の側にある阿弥陀堂は、地区住民の浄財で震災前に改築したばかりだった。震災後、仏像も新調し、令和六年二月十七日に、みぞれが降りしきる中、開眼供養を行った。

不動さんへのお参り

北沖の不動堂は、お不動さんと呼ばれて親しまれ、地域でお祭りをしていた。火を背にする不動尊が祀られている。消防団は、毎年、出初式の前にお参りするのが習いだった。



炎を背にした
不動明王像

愛宕神社の氏子親睦会

一度崩れて、その後小さな祠が寄付された。北組の人たちがお祭りをしていた。縁日には、のぼり旗を立てて近所の氏子さんの根本さんの家で親睦会をした。

馬頭尊の石刻

路肩に造立された「馬頭尊」と刻まれた石は、馬を病気や災難から護る馬頭観音信仰を示していて、馬が大切にされていた往時が偲ばれる。

お地藏様

南迫、官林さん宅から百メートル東の山の中にお地藏さまがある。触ると具合が悪いのが治るといので、擦り減って鼻もない。



山の中のお地藏様



道端に見られる馬頭尊の石刻

コラム④ :: 下羽鳥の農業

「二浦（小高）、二羽鳥、三熊川（大熊町）」と謳われたように、下羽鳥は浜通り屈指の米どころでした。手作業の時代から、現代に至る記憶です。

一反区

古くからは場が一反区に整備されていた。現在は農業機械が大
型化され小さく感じるが、当時としては画期的だった。

土側溝の掘り上げ

「これをやらないと水通せないから農作業に入られない。」土側溝
だったので、掘り上げ人足が、「なぎなた」という道具を使い、固まっ
た泥を除いて作り直す作業が欠かせなかった。震災前まで三月頃、組
ごとに作業範囲が決まっていた、一軒から二人くらいずつ出していた。

迫（さく）：小さな谷）の作業

迫の小さな田はシロコ（手じろ）で代かきをした。稲刈りは、
手刈りからバインダーになった。乾燥は、稲架（はぜ）掛けだった。

田植え

田植えは早い人で五月十日くらいで、六月まで続く。昔は、田
植えの頃は、まだ手がかじかんだ。田植えは、結（ゆい）という
集団で共同作業をしていた。結と組は、同じではなく、組の中で

調整して結ができていた「持ち回りでそのうちにお手伝いに行っ
て、夜みんなでご飯ごちそうして、万歳やったり、終わりに。」結
ではなく町から人を雇うこともあり、朝の四時くらいから二十人
くらい来ていた。

こじはん・一服

農作業の合間におにぎりやしみ餅を食べることを、こじはん
か一服とか言った。

田んぼは大人の仕事

実家のタバコ栽培は、子どもも頭数で手伝われたけど、田ん
ぼは、機械化された後は大人だけで出来た。子どもには、社会人
になってから苗を運んだり、機械の跡を均（なら）したりさせた。

野菜の苗作り

稲作の傍らナス、キュウリ、カボチャなど野菜、タバコの苗も。
苗市は駅前で道路を通行止めにして、花木の苗も売られて、にぎ
わっていた。

大豆栽培

減反対応で震災前、集落営農組合を結成して十町近くで大豆を
作っていた。全てJAに出荷したが、一年に一回、自分たち用の豆
腐やおからを作ってもらって、みんなに配った。生産組合では場
整備の計画をしていたが、震災で中止になった。

地震の様子

震災の時は、ちょうど犬の散歩に行き、北沖の本林健治さんの家の前まで行ったとき、今まで経験したことのない不気味な地鳴りと大きな揺れが始まった。田んぼも道路も海のように波打ってたね。コンクリートの電柱も折れんばかりに曲がっていた。これでそろそろ終わりになるかと思うと、さらに大きな揺れが続く、更に大きく揺れる。この世は終わりかと思われた。四分ほど揺れが続いて、そして、西の山の方を見ると、地震で杉の木が揺れるものでスギ花粉が飛んで空が真黄色に染まっていた。南迫の方を見れば、ぼーんぼーんと煙が上がった。家がつぶれたところから舞い上がった土埃だったと思う。あちこちの地面から水が噴水のようには噴き出していた。

原発周辺からの公民館への避難

二〇一一年の原発事故が起こった夜、羽鳥公民館には、双葉町郡山地区の住民が避難した。



平成 23 年 3 月 11 日の羽鳥公民館室内

避難と一時立入

避難指示継続中は一時立入り申請をして、墓参りをしていた。

大字交流会

各地に避難した下羽鳥の住民に連絡を取って、年に一回の交流会を開催してきた。ふるさとをこれからどうしていくか考えるためにも必要だが、若い世代の参加があまりなく、世代を超えた交流が課題になっている。

一部を残しての避難指示解除

二〇二四年十二月二十一日現在、下羽鳥は、特定復興再生拠点区域と帰還困難区域に分かれている。境界にバリケードが設置され、下羽鳥の四組のうち一組に帰還困難区域が残る。二〇二四年に帰還困難区域の中の特定帰還居住区域の範囲が下羽鳥にも広がって家屋の解体申請ができるようになった。

特定復興再生拠点区域の現状

営農再開

下羽鳥では、稲作は再開されていないがブロッコリーが栽培され、二〇二二年から出荷されている。ため池、羽鳥用水路の

灌漑は、復旧していないが、今後、大型機械が入るようなほ場への整備事業が計画され、土側溝にもU字溝が入る。二〇二四年に特定復興再生拠点区域の農地利用について、法人化を目指す担い手に地権者が営農を委託することが合意された。

帰還の希望と難しさ

二〇二五年一月十三日現在、下羽鳥地区に四戸が戻り、居を構える。一方で、帰りたくても帰れないという人もいる。町のインフラは整備途中であり、住居は風雨や獣害で新築が必要、加えて、同世帯の中でも意向が異なり決めることが難しい。「私らが生まれ育ったところだから、明日にでも、今でも帰りたいけれども。ふるさとだから、戻りたい。」と親世代の希望があっても、若い世代は、避難先で仕事を見つけたり子どもが学校に通っていたり、避難先で生活の基盤を固めている場合が少なくない。

自宅への複雑な思い

帰ることがかなわない自宅でも、避難指示が解除されてから除草などの管理が必要になった。家を解体した跡地には固定資産税がかかる。先祖が守ってきた土地だけど、今後は、どのようにしたらいいのか、戸惑いがあり、避難指示が解除されてこそその複雑な思いがある。

帰還困難区域の現状

下羽鳥に一部残った帰還困難区域内では、二〇二四年に解体の申請ができるようになった世帯もある。一方で、二〇二五年一月現在、解体や除染のスケジュールが分からない世帯もまだ残っている。

コラム⑤ おらほの方言

本誌の第二部では、思い出を話し合った時の地域の言葉を残すようにしました。ここには、本文には、出てこなかった地域の特徴ある言葉を集めています。ほんの一部なので、書き足して頂ければ幸いです。

うわか…上部

うるがす…水などに浸す

えーべ…行こう

えがっぺ…良いだろう

えっこ…犬

えんと…赤ちゃんのお座り

おだつてる…調子に乗ってる

おだばこ…おやつ

おぢちる…落下する

おっかねー…怖い

おつけ…味噌汁

おっぱなす…おいて行かれる

おど…赤ん坊

がおつてる…調子悪い

かからし…邪魔くさい

かすかたれ…バカ言うな

かんかち…火傷

かんまがす…かき混ぜる

く…食べる

くらすける…ひっぱたく

け…食べる

けいちゃ…うらがえし

けつぬけ…戸をきちんと閉めない

げるあげる…嘔吐する

こ…来なさい

こわい…疲れる

さすけね…大丈夫

しこたま…沢山

しゃっこい…冷たい

しょうし…恥ずかしい

じんぎしんな…遠慮するな

すいしよわかす…風呂を沸かす

ずない…大きい

ずるずる…ぐすぐす、のんびり

たんがく…持ち上げる

つつたす…つき刺す

つつぺった…(水などに)落ちた

つんのめる…転ぶ

でかす…終わらす

でっころぶ…転ぶ

コラム⑤ おらほの方言 (続き)

でれすけ…だらしない

とをたてる…戸を閉める

なげる…捨てる

なした…産んだ

なずき…額

にしゃ…お前

ぬぐい…暑い

ぬったぐる…塗りつける

ねばる…くつつく、張り付く

のば…素っ裸

はぐった…はずれた

はだつ…始める

はらくつち…満腹

ほうか・ほうが…そうですか

ほうげねい…分かんない

ぼじよごれる…壊れる

ほまち…小遣い

ほろつた…落としたり

ふだになる…いっぱいになる

へでなし…しようがない

までいに…丁寧に

まんま…ご飯

まなぐ…目

むぐす…漏らす

めくせ(めんくせ)…見た目が悪い

もごい…可愛い

やいべ…行くぞ

やんだぐなる…嫌になる

わらし…子供

んぐ…行く

んがね…行かない

んだが…そうですか

んだけんちよも…そうは言うけれど

んまぐね…不味い

大字誌下羽鳥の記憶 制作チーム紹介（五十音順・敬称略）

下羽鳥地区大字誌編集委員

木幡敏郎（委員長）

榎内宏

大西俊彦

北崎勇

栗田要

堀川光男

前田洋海

本林秀尚

横山実

産業技術総合研究所

保高徹生（監修）

金井裕美子（編集・インタビュー）

高田モモ（編集・インタビュー）

五十嵐順子（イラスト）

佐々木大記（インタビュー）

藤井新子（インタビュー）

大字誌 下羽鳥の記憶

発行日 二〇二五年二月二十六日

編集・発行 産業技術総合研究所 地質調査総合センター
地圏資源環境研究部門

印刷所 株式会社C I A

福島県伊達市梁川町やながわ工業団地九十・一
TEL..〇二四・五七七・〇〇七五

本誌記事写真等の無断転載を禁じます。

